報　告

乳幼児の不慮の事故に対する父親の認識と行動

大重育美

〔論文要旨〕

父親における子どもの不慮の事故防止に対する認識と行動を明らかにすることを目的として，保育所通所中の乳幼児を持つ父親９名を対象に半構造化面接を実施した。子どもの事故防止に対する父親の認識と行動に関してインタビューを行い質的帰納的に分析した結果，５つのカテゴリーが抽出された。それは，父親が子どもの行動を予測して目を離さない，父親が子どもの事故防止の情報を入手する，父親が子どもの生活環境を整える，父親の生活を子ども中心に転換する，父親が子どもに危険を教えるという５つのカテゴリーであった。また，父親が子どもの不慮の事故防止についての教育受講経験が少ないことも明らかとなった。

Key words：不慮の事故，乳幼児，父親の認識と行動

Ⅰ．はじめに

子どもの死亡の原因として，１～19歳では不慮の事故が第一位であり，事故に対する傷害は小児の重要な健康問題となっている[1]。不慮の事故防止は母子保健の中でも重要課題として位置づけられ，「健やか親子21」では，不慮の事故の死亡率半減を目標としている。各自治体では，健診でのパネル展示，パンフレット配布，事故チェックリストを用いた集団および個別指導が行われているが，その効果は現れていないという報告がある[2]。不慮の事故の要因として，養育環境が大きな影響力を及ぼしていることは周知で，母親の事故防止意識が幼児の負傷を低下させる効果[3]，家庭内の不慮の事故におけるケースコントロール研究では他者が親を支援する介入によって転倒リスクが4.5倍減少することなどが明らかになっている[4]。養育環境の担い手となる父親を対象とした研究では，子どもが生後６か月の時に父親が育児に関わることで，生後18か月の時点での不慮の事故の発生が予防できることが示された[5]。共働きの親を対象とした子どもの不慮の事故防止に関する支援方法を探るためには，実際に乳幼児をもつ父親の視点から，日常生活の中で父親が子どもの不慮の事故防止に対してどのように認識し，具体的な行動をとっているかを分析することが有効である。

そこで本研究では，夫婦で共働きをしながら乳幼児の子育てをしている世帯を取り上げ，子どもの不慮の事故の経験をもとに，子どもの事故防止に関する父親の認識と行動を明らかにすることを目的とした。

Ⅱ．研究方法

１．対象者

本研究では，保育所に通所中の乳幼児をもつ父親とした。通所中の父親を対象とした理由は，共働きであり父親の家庭内での役割が不可欠と考えたからである。

Paternal Recognition and Actions in Response to Unintentional Injury of Children
Narumi OOSHIGE
長崎県立大学看護栄養学部看護学科（研究職／小児看護学）
別刷請求先：大重育美　長崎県立大学看護栄養学部看護学科　〒851-2195 長崎県西彼杵郡長与町まなび野1-1-1
Tel/Fax：095-813-5187

〔2330〕
受付 11. 5. 6
採用 12. 6.27

Presented by Medical*Online

2．調査期間

平成22年7月～8月。

3．調査方法および調査内容

調査方法は，研究者が研究参加の同意の得られた対象者に対して，プライバシーが確保できる保育所内の個室で1回20分程度を目安に，インタビューガイドに基づき半構造化面接を実施した。調査内容は，子どもの事故防止としての父親の認識と行動に関する「事故防止のために日常的に気をつけていること」，「事故防止として日常的に行っていること」についてとし，対象者に自由に話してもらった。属性として，両親の年齢，職業，子どもの年齢と性別，兄弟の数，平日および休日の育児時間，育児サポート体制の有無，祖父母の同居の有無，子どもの事故およびヒヤリハットの経験の有無，事故発生時の対象者の状況，事故の当事者および場所，子どもの事故防止教育経験について聞き取り調査を行った。

4．分析方法

本研究では，質的帰納的な分析を行った。分析方法は，1事例ごとにインタビュー内容を逐語録に起こし熟読し，父親の子どもの事故防止についての経験を表している内容を要約したコードを例示し，抽出されたコードを意味内容において類似するものを集めてグループ化しサブカテゴリーとした。サブカテゴリー間で関連するものは，意味内容に従ってまとめてカテゴリーとした。さらにカテゴリーをまとめて大カテゴリーとし，1つのまとまりとした。データ分析での信頼性・妥当性を確保するために，対象者1名に自分が話した内容と研究者が作成したコードおよびカテゴリーにずれがないかどうかを確認してもらった。また分析過程では質的研究を専門とする大学教員にスーパーバイズを受け，繰り返しによる分析内容の信頼性を確保した。

5．倫理的配慮

本研究は，保育施設責任者の許可を得て実施した。対象者には，研究の目的と方法，研究への参加は自由意思であり，研究に同意したことはいつでも撤回できること，データは研究のみに使用し結果の公表は対象者が特定できないようにすることを口頭および書面にて説明し同意を得た。インタビューの途中であっても負担を感じた場合は，いつでも中断できることを説明した。録音資料や内容を記録したものは研究が終了次第，破棄することを説明した。面接は，個室で人の出入りが少ない部屋を選択し，面接が中断されないよう配慮した。

Ⅲ．結　　果

1．対象者の概要および子どもの事故の経験

対象者は，保育所に通所している子どもを持つ父親9名で，父親の平均年齢は36.1歳（28～43歳），母親の平均年齢は33.8歳（27～39歳）であった。保育所に通所している子どもの年齢は，26.8か月（2か月～5歳）であった。面接時間は，平均17.4分（10～32分）であった。対象者全員が，夫婦ともフルタイムで仕事をしており核家族世帯であった。子どもの数は，平均2.3名（1～3名）であった。父親の平日の育児時間は，平均2.9時間（ほとんどない～4時間）で，休日は平均12.9時間（8～15時間）であった。育児のサポート体制は，1名を除いて祖父母から受けているが，全員別居で近くに住んでいた。

子どもの事故の経験は，9名中8名が遭遇していた。事故に遭う出生順位は，7名が第1子であった。事故に遭う年齢は，平均27.8か月（10か月～5歳）であった。事故の内容では，転落が最も多かった。事故の回数は，1回だけでなく数回繰り返し，事故の内容は転落と手を挟むなど多様な事例であった。事故発生時の状況としては，屋内5件，屋外3件と屋内が多かった。当事者としては，6名が父親を含む親がその現場に関わっていた。事故後に医療機関を受診したのは，4件であった（**表1**）。

2．子どもの事故防止に対する父親の認識と行動

分析の結果，76のコード，20のサブカテゴリーと5のカテゴリーが抽出された。なお，【　】を大カテゴリー，〔　〕はカテゴリー，（　）はサブカテゴリー，「　」はコードの例示とした。

子どもの事故防止に対する情報入手の方法では，父親が子どもを叱る時に母親との役割分担を考えたり，子どもが就寝後に子どもの性格や行動について夫婦で情報を共有したりすることを（子どもの事故についての夫婦での語らい）とし，「妻が子育ての教科書なのかもしれない」，「妻が体現してくれるので，そこから自分なりに見て勉強する」という父親の語りから（妻

Presented by Medical*Online

表1　対象の概要および事故経験

		A	B	C	D	E	F	G	H	I
父親の年齢		40歳代	30歳代	30歳代	30歳代	40歳代	30歳代	30歳代	30歳代	20歳代
職業		看護師	薬剤師	公務員	会社員	教員	公務員	理学療法士	会社員	看護師
母親の年齢		20歳代	30歳代	30歳代	30歳代	30歳代	30歳代	30歳代	30歳代	20歳代
職業		看護師	看護師	美容師	看護師	教員	医療関係	医療関係	介護関係	看護師
通所中の子どもの年齢		8か月	3か月	5歳	5歳	3歳	1歳	2か月	2歳	3歳
通所中の子どもの性別		女	女	男	女	男	男	男	男	女
兄弟の数		0	2	1	1	1	2	2	1	1
育児時間	平日（時間）	4	2.5	3	3	2	4	1	ほとんどない	3
	休日（時間）	12	15	10	9	15	15	12	10	14
育児サポート体制の有無		あり（母方祖母）	あり（両親の祖父母）	あり（父方祖父母）	あり（母方祖父母）	なし	あり（母方祖父母）	あり（母方祖父母）	あり（母方祖父母）	あり（母方祖父母）
祖父母の同居の有無		別居	別居	別居	別居	別居	別居	別居	別居	別居
事故の経験		なし	転落，誤飲，溺水，挟む事故，切る事故	転落，道路への飛び出し	転落	転落，挟む事故	挟む事故	溺水	転落	転落，挟む事故
事故発生時の対象者状況	子どもの順位	なし	第1子，第2子	第1子	第1子	第1子	第2子	第1子	第1子，第2子	第1子，第2子
	年齢	なし	5歳，3歳	2歳	4歳	10か月，5歳	1歳，2歳	3歳	2歳，1歳	2歳，2歳
	事故の内容	なし	転落	転落	転落	転落	挟む	溺水	転落	挟む，転落
事故発生時の状況	当事者	なし	両親	親以外	父親	母親	父親	父親	両親	父親
	場所	なし	台所（椅子）	屋外（遊具）	屋内（階段）	屋外	屋内（ドア）	風呂	屋内（階段）	屋外（遊具，車）
医療機関受診		なし	なし	あり（入院）	なし	あり（入院）	あり	なし	なし	あり
ヒヤリ・ハットの経験		あり（火傷）	あり	なし	あり	あり	あり	なし	なし	あり
子どもの事故防止教育経験		あり	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
インタビュー時間（分）		30	21	10	12	15	11	11	15	32

が事故防止モデル）とした。子どもの不慮の事故について，対象の父親9名中8名が教育経験はないと話しており，(事故防止についての教育経験がない)とした。その一方で，子育て経験者，幼稚園や小学校などから，父親が子どもの事故防止の情報を入手していることから，（地域の学校，他の親から学ぶ）とした。また，事故や虐待の報道から自分ならどう対処できるかと考えることから，(報道・メディアから学ぶ）とした。このように，さまざまな媒体から父親が主体的に情報を入手することを，〔父親が子どもの事故防止の情報を入手する〕とした。

「子どもが1人なら親も一緒に行けるなら連れていく」と親が子どもと行動を共にするか，子どもをそばに置くなどの工夫をしている様子から（事故防止として一緒に行動する），父親が子どもの行動を予測すること，最善の予防策を親が行うことを重要視していることから（事故防止で大切なことは予測すること），父親が子どもの性格を考えた対応および年齢に合わせた接し方をしていることから（子どもの年齢や性格に合わせて接する）の3つのサブカテゴリーを抽出し，〔父親が子どもの行動を予測して目を離さない〕とした。

父親がドア，窓などにロックをつけていることから（子どもの不意の行動を制限するためにロックや柵をする）とした。他にカッター，タバコ，薬，口に入る大きさの丸いものなど（危ない物を子どもの手の届かない所に置く）ことや，机の角や扉にクッションをつけ，怪我をしないよう（子どもの事故防止のために環境を整える）行動をとっていた。このように子どもの行動範囲の視点から環境を整備することを〔父親が子どもの生活環境を整える〕とした。

父親が「火傷をしないように自分の嗜好である熱燗をロックに変更する」，「誤飲をしないように豆類も食べないようにした」など嗜好を変えることや，「どこかに出かける時には目立つ色を着て子どもが捜しやすいように気をつける」など父親が子どものために服装に気をつけることを話していた。また，「子どもをペットではなく一人の人間として見ることを忘れないよう

Presented by Medical*Online

にしたい」，「子どもができたら主役が自分たちではなく子どもたちという視点の切り替えができるかどうかが大事だ」と，生活の中心を自分から子どもへと転換する父親の認識の変化を述べていた。これらのことから，（危険を減らすために父親の行動を変える），（子どもを一人の人間として扱う），（子ども中心となる生活への変換を自覚する）の3つのサブカテゴリーを〔父親の生活を子ども中心に転換〕とした。

父親が「子どもが興味を示している物を実際に触らせて熱さを体感させる」，「子どもと一緒に道路に出て車の怖さを教える」と話していることから，（子どもに危険性を体感させる）とした。子どもが転落した後から，親が教えていないにもかかわらず子ども自身でお尻から階段を下がることを父親が確認していることから（父親が子どもの事故防止能力を確認する）とした。危険な場所に行くときは兄弟の上の子が下の子をみるように声かけをしていることから，（上の子の協力を得る）とした。父親が子どもとルールを作り約束を守らせることを（父親と子どもの約束事をつくる）とした。父親が子どもに親の言うことを守るようなしつけをする，口調を強くする工夫などを（親の言うことを聞く子どもに育てる）とした。父親が「不慮の突然の事故に備えて，子どもに日頃注意すべきことを毎日繰り返し伝える」，「一緒に行動するだけでは子どもは危険がわからないので具体的に教える」という子どもの事故防止に対する父親の積極的な関わりを話していたことから，（注意すべきことを具体的に教え，子どもに自覚させる）とした。これらの6つのサブカテゴリーから〔父親が子どもに危険を教える〕とした（表2）。

以上の5つのカテゴリーから大カテゴリーを【子どもの事故防止に対する父親の認識と行動】とした。

Ⅳ．考　　察

今回，対象となった父親の育児関与時間は，平日で平均2.9時間，休日は平均12.9時間で先行研究[6]と同様の結果で，フルタイムで就業して平均的に育児に関わっている父親の状況がうかがえた。

不慮の事故は，対象者9名中8名が経験していた。事故の種類は転落が8名中6名と最も多く，その後に入院した者は2名いた。事故に遭遇した事例が8名中7名で第1子に多いことは，先行研究[7,8]と同様の結果であり，第1子であることが事故要因といえた。事故に遭遇した回数については，1回だけでなく数回繰り返し，事故の種類もさまざまに遭遇していた。

事例Aは，火傷しそうになった経験をしていた。【子どもの事故防止に対する父親の認識と行動】では，「予測することが事故防止のために大切と思う」と述べて，実際に危険を減らすために自分の嗜好品を変更するなど子ども中心の生活に変換していた。その背景に，「認定看護師の学校で学んだ」という発言から，子どもの事故防止について教育を受けていたことが影響していたと考えられた。また，父親は子どもが興味を示していた炊飯器に触れさせて危険性を体感させていた。父親が子どもの興味を把握したうえで，8ヵ月という子どもの年齢に応じた事故防止策を行っている事例と捉えた。事例Bには，子どもが3名おり，不慮の事故としては5種類を経験していた。【子どもの事故防止に対する父親の認識と行動】では，医療者である妻を事故防止モデルとして捉えており，実際に妻をみて自分なりの対処行動を行っていた。さらに，父親が子どもを一人の人間として扱うような姿勢をもって対応し，事故に備えて，日頃から子どもに注意すべきことを繰り返し伝えていた。子どもの年齢が3～5歳であることから，子どもの理解に応じて子どもに危険を教えるという事故防止策を行っていた。事例Eは，海外でのトイレの台からの転落を経験し母親が当事者であった。【子どもの事故防止に対する父親の認識と行動】では，事故防止として子どもと一緒に行動するようにしており，子どもと約束事として，人ごみの中で舌を鳴らすと父親を捜すというルールを作り，外出時に子どもが父親を捜しやすいように意識的に目立つ色の服を着て行動し，親の言うことを聞く子どもに育てることが重要と捉えていた。子どもの年齢が3～5歳であることから，親の言うことを聞くことを普段のしつけの中で行い，子どもと約束事を行うことで事故防止につなげていた。事例Iは，第1子が遊具からの転落，第1子および第2子が車のドアで指を挟んだ事故を経験していた。【子どもの事故防止に対する父親の認識と行動】としては，父親が子どもと一緒に行動して予測することが大切と述べており，実際に休日は朝起きて寝るまで子どもと一緒に行動していた。父親が子どもの性格や年齢に応じた接し方を実践し，事故防止として環境を整えていた。また，父親が子どもに危険を教えることも重要視しており，その中で子どもと約束事を行い，注意すべきことを具体的に教えるため

Presented by Medical*Online

表2　子どもの事故防止に対する父親の認識と行動

カテゴリー	サブカテゴリー	コードの例示
父親が子どもの事故防止の情報を入手する	子どもの事故についての夫婦での語らい	C：叱る時に両親で同時に叱るのではなく片方ずつ役割を持って子どもに逃げ場をつくることが大切と思っている G：育児という点では夫婦でどのような時に怒るとか怒るところが違うとか意見を言い合う。父親が母親を頼りにしていて，父親は見守る立場をとっている I：子どもが夜，寝てから夫婦で子どもの性格や行動についておおざっぱではあるけれど話したりする
	妻が事故防止モデル	B：妻が子育ての教科書なのかもしれない B：妻が子どもを見るときに注意すべきことを体現してくれるので，そこから自分なりに見て勉強する
	地域の学校，他の親から学ぶ	B：子育てを経験した親の方々の経験のうえでのアドバイスは大きい D：事故防止についての情報は友人に話を聞く I：幼稚園，小学校での子育ての仕方の勉強会に参加して学習する
	事故防止についての教育経験がない	B：父親が，育児において事故を防ぐ教育や指導は受けたことはない D：事故防止の教育を受けた経験はない I：事故防止について教育を受けた経験はない
	報道・メディアから学ぶ	I：虐待の報道は反面教師で自分を戒めるきっかけになっている I：ニュースなどの事故の報道を見て自分ならどうしたら防げるのかを考える
父親が子どもの行動を予測して目を離さない	事故防止で大切なことは予測すること	A：いつ何が起こってもどういう状況でなるかわからないので最善の予防策を親がすることが必要 A：子育てをしている中で大事なことはマニュアル通りでないということ B：予測をすることが事故防止のために大切だと思う A：子どもが台に手が届くことは予想していなかったので驚いた F：1歳になる前だったので，階段の入り口に柵をしていなかった。一番上まで登っていてびっくりした。まさか登るとは思っていなかった F：子どもはいつのまにか成長して昨日までできないことができていることがある
	事故防止として一緒に行動する	C：子どもが1人なら親も一緒に行けるなら連れていく D：子どもは活発に動くから，一緒にいるときには目を離さない E：完全には（目を離さないことは）無理なので行動を共にするように必ずそばに置く G：遊び始めると長男も忘れてしまうので，見ていられない時は一緒に外で遊ぶ H：状況によって異なるが子どもと一緒に行動することが，間違えがない I：朝から起きて寝るまで子どもとほとんど一緒にいて，6歳までは子どもが遊びに行く時も一緒について行っていた I：自分がいる時は必ず子どもと一緒に風呂に入る
	子どもの年齢や性格に合わせて接する	I：自分の子どもの性格を見て，子どもに合うように考えて接する I：兄弟で年齢差があるけれどその子に合った接し方をしている
父親が子どもの生活環境を整える	子どもの不意の行動を制限するためにロックや柵をする	A：ドアのロックをかける A：階段の入り口にロックをかける A：窓の上の方にロックをかける C：通り越さないように階段にフェンスはつけていた F：ドアのロックはしませんが，ビデオデッキの開き戸が開かないようにした F：そのあとから階段の入り口に柵をつけて登らないようにした G：実際には，階段とかに柵をして行動を制限していることがあった H：事故防止として，すべてのドアにロックをつけ，机の角にクッションをつけたが実際には使っていない
	危ない物を子どもの手の届かない所に置く	A：39mm大の大きさまでは何でも口にすると認定看護師の学校で聞いたので下に物を置かない B：子どもの手の届かない場所にタバコを置く B：自宅では薬の誤飲をしないように注意していた F：丸いもの，姉が買ってきた駄菓子などもすぐ片づけて口に入れないように手の届かない場所に持っていく F：事故の防止としては，危ないものはあらかじめ教えておく，手の届かない場所に置く I：事故防止として，下の子が使いそうなカッター，タバコ，包丁は見える場所に置かない
	子どもの事故防止のために環境を整える	B：怪我をしてもひどい怪我にならないような環境であるかを確認する D：危ないなと思ったら，自分の判断で（環境を）ちょこちょこ改善している I：親の視点から見て，環境を整える意識のうえで生活をすることが大事だ I：子どもの手の届く範囲は机の角や扉など，できるだけ深い怪我をしないようにあらかじめ環境を整える
父親の生活を子ども中心に転換	危険を減らすために父親の行動を変える	A：風呂に水をためない A：火傷をしないように自分の嗜好である熱燗をロックに変更した A：誤飲しないように豆類も食べないようにした E：どこかに出かける時には目立つ色を着て子どもが捜しやすいように気をつけている
	子どもを一人の人間として扱う	B：子どもが言うことを聞かないと叱るため，しつけ以上のこともあるので虐待と紙一重と思う時がある B：子どもをペットではなく一人の人間として見ることを忘れないようにしたい
	子ども中心となる生活への変換を自覚する	B：子どもができたら，主役が自分たちではなく子どもたちという視点の切り替えができるかどうかが大事だ G：次世代の父親に対しては子どもができると遊べなくなるよと伝えている。自分の時間がとれなくなると同僚や後輩に伝えている
父親が子どもに危険を教える	子どもに危険性を体感させる	A：子どもが興味を示している炊飯器の危険性を体感させて二度と触れないようにさせた D：道路を歩く時，飛び出したりすることは，車で実際に教えて今はだいぶなくなった H：事故を防止するためには何でも経験が大事と思っている
	父親が子どもの事故防止能力を確認する	H：特に気をつけていることはないが，子どもが教えていないにもかかわらず階段をお尻からおりるようになった I：4歳以降になると指を挟むことが予測できるので自分で手をひっこめたりする
	上の子の協力を得る	G：普段気をつけていることは，ドアで遊んだり，危険なところに行く時は長男に下の子をちゃんとみるように声かけをしている
	父親と子どもの約束事をつくる	E：舌を鳴らすことがサインで父親を捜すという子どもと父親のルールを作っている I：子どもが小学生になり自分で判断できると考え，ついて行かないようにしたが帰る時間は約束している
	親の言うことを聞く子どもに育てる	E：子どもの事故を防ぐためには絶対に親の言うことを聞く子にしないといけないと思っている G：事故防止として，近くの川は危ないから行くなと強い口調で言えば言うことを聞いている
	注意すべきことを具体的に教え，子どもに自覚させる	B：不慮の突然の事故に備えて，子どもに日頃注意すべきことを毎日繰り返し伝える F：子どもに自覚を持たせたうえで見守る G：事故が少ない理由としては危ない所には行かせないようにしている I：親の責任として，車に乗る時には毎回，足は大丈夫か，手は大丈夫かというか確認をしている。その後も2・3回挟んだが今はない I：一緒に行動するだけでは子どもは危険がわからないので具体的に教える I：横断歩道の場合には子どもの目線になって一緒にこの信号は今どうなのか，車は来ていないのか，右を見て左を見て大丈夫なら渡ろうというようにしている I：自分だけの子どもだけでなく他の子どもに対する影響も考えてボール遊びなどする場合に1歳位の子がいたら当たったら危ないのでそこでは遊んではいけないと教える I：スーパーで走り回っている場合には，人の目を気にせず，スーパーが何をするところなのか，今何をしていたのか，何をすべきかなどをわからせるように話す I：横断歩道を渡る時ぶつかったら自分の子も被害を受けるけど相手もずっと頭に残ることになるので注意して予防できることはなるべくしたい I：約束の時間を5分でも過ぎれば，どうしたらいいのかを言い聞かせる。最近は不審者も多いので注意している I：子どもは自分で判断できないので一緒についていき行っては駄目なことや気をつけるべきことを教える

Presented by Medical*Online

に，子どもの目線になって横断歩道に立つ，スーパーで走り回っている時にはその場で叱るなど具体的な行動をとっていた。車のドアで指を挟む事故については，父親が2回以上経験しているため，乗車時に「足は大丈夫か，手は大丈夫か」と毎回確認していた。さらに「その後も2・3回挟んだが今はない」と話した。このように1度の不慮の事故を通して行動を変えても繰り返すことがあり，継続して言い続け，子どもの成長過程で理解できるようになることによって次第に不慮の事故も減少していくことがわかった。

事例Ｉは，「子どもが夜，寝てから夫婦で子どもの性格や行動についておおざっぱではあるけれど話したりしている」と話し，子どもの性格や行動について夫婦の語らいの機会を持っていた。また事例Ｂは，妻を事故防止モデルと捉え，子どもの事故防止の視点を学んでおり，夫婦関係が良好な状況であることが推察できた。このように夫婦間のコミュニケーションが良好な状況が，父親の育児参加意欲に影響しているのと同様の効果[9]と考えられた。事例Ｉは，朝から寝るまで子どもといるようにしていると話し，実際に一緒に行動するなど年齢や性格を踏まえた対応をしていた。

対象の父親9名中8名は，子どもの事故防止について教育受講経験はなかった。（子どもの事故防止のために環境を整える）という中では，事例Ｄは「危ないと思ったら自分の判断で（環境を）ちょこちょこ改善している」という日常的に危険防止に注意を払っている様子を話した。父親の役割認識として子どもの環境を整えるという行動は，育児に対する肯定的意識につながっている行動の現れと考えた[10]。特に事故を経験していない父親Ａは，（子どもに危険性を体感させる）ことを重視していて，具体的に「子どもが興味を示している炊飯器の危険性を体感させて二度と触れないようにさせた」と話していた。これは予防意識が高いことの現れで，事故を経験していない者の方が予防の実施率が高いという報告と一致していた[11]。

不慮の事故防止に対して，父親が〔子どもの事故防止の情報を入手する〕，〔子どもの行動を予測して目を離さない〕，〔子どもの生活環境を整える〕，〔生活を子ども中心に転換する〕，〔子どもに危険を教える〕ことを認識し行動していることが明らかになった。対象の父親らは，子どもの行動を予測して言い聞かせ，危険の体感，子どもとの約束事など自分たちで独自の予防策を見出していることもわかった。対象の父親が平均的に育児に関与している様子から，子どもと行動を共にする過程で事故を予測する力を培っていると捉えた。特に子どもの行動を予測した対応，事故の予防意識が高い発言がみられた父親Ａ，Ｂ，Ｉは医療専門職であったことから，父親の職業的背景が子どもの事故防止の認識と行動に影響を与えている可能性が示唆された。

これからは，育児関与が少ない父親に対するアプローチが重要となる。特に育児関与が少ない父親は，育児の中で子どもの行動を予測する機会が少なくなりやすく，対処行動がとれない可能性がある。また，父親が育児に関与する時間が確保できない場合も考えられるため，職場において子どもの事故防止に対する情報が入手しやすいシステム構築を行うことも必要と考える。そこで，乳幼児をもつ父親間で，起こってしまった不慮の事故の経験を共有していく機会を設けることが有用と考える。

研究の限界として，本研究の対象者は，保育所に通所中の標準的な共働きの父親として，特定の保育所に通所中の父親としたが，地域性については考察できていない。今後は，地域に応じた父親への子どもの事故防止教育プログラムが重要となってくる。そのため，今回の結果から導き出されたカテゴリーの構成因子をもとに質問紙を作成し，世帯状況，親の職業など背景を考慮して異なる地域による比較研究が必要である。

Ⅴ．ま　と　め

子どもの事故防止に対する父親の認識と行動は，子どもの行動を予測して目を離さないということを中心として，子どもの事故防止の情報を入手する，子どもの生活環境を整える，父親の生活を子ども中心に転換する，子どもに危険を教えることで構成されており，子どもの不慮の事故の経験が影響していることがわかった。

医療専門職の父親は，事故防止意識が高い可能性があるため，職業的背景によって事故防止の認識と行動に影響があることが示唆された。

文　　献

1）山中龍宏．傷害予防につながる情報収集へのアプローチ．小児保健研究　2008；67（2）：177-190.
2）藤内修二．「健やか親子21」推進の効果に関する研究～乳幼児健康診査時の事故防止対策の効果～．厚生

Presented by Medical*Online

労働省科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）. 2006.
3) 野久保美紀，岡部充代，宮田さおり，他．乳幼児の事故防止に関する意識についての調査研究．三重看護学誌 2006；8：75-86.
4) John C, LeBianc I, Barry Pless W, Jams King, et al. Home safety measers and the risk of unintentional injury among young children：a multicentre case-control study. CMAJ 2006；175 (8)：883-887.
5) Takeo Fujiwara, Makiko Okuyama, Kunihiko Takahashi. Paternal involvement in chaildcare and unintentional injury of young children：a population-based cohort study in Japan. International of Epidemiology 2009：1-10.
6) 田中和江，橋本紀子．父親の育児とそれに対する支援の現状と課題―父親の労働時間と育児参加からみる一考察―．女子栄養大学紀要 2007；38：53-80.
7) 茂本咲子，出井美智子．岐阜県における乳幼児の事故の実態―発生する可能性を含めた分析―．岐阜県立看護大学紀要 2004；4 (1)：32-38.
8) 濵 耕子，渡辺鈴子．生後1年6か月までに医療機関を受診した子どもの事故と関連要因．小児保健研究 2007；66 (1)：10-15.
9) 小西秀代．現代の父親の育児参加意欲に関する要因 0歳児の育児指導に対するニード．神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録 2004；29：212-219.
10) 川上あずさ，牛尾禮子．父親の育児への参加状況と育児に対する意識に関する研究．日本看護福祉学会誌 2007；12 (2)：108-114.
11) 金泉志保美，柴田眞理子，宮崎有紀子，他．年齢別にみた家庭における乳幼児の不慮の事故実態と事故予防策．日本公衆衛生誌 2009；56 (4)：251-259.

〔Summary〕

This study aimed to identify fathers' recognition and actions to prevent unintentional injuries involving their children. We conducted semi-structured interviews with 9 fathers of infants and toddlers attending day-care centers and nurseries. The subjects were asked about their recognition of child accident prevention and actions. The interview results were analyzed employing a qualitative and inductive approach. As a result, the following five categories were extracted as representing the fathers' recognition and preventive actions："anticipating the child's movement and keeping a close eye on him/her", "obtaining information on child accident prevention", "creating and improving the child's living environment", "shifting their life to a child-centered one", and "teaching the child about danger". It was also found that these fathers had little experience of attending seminars on the prevention of unintentional injuries involving children.

〔Key words〕
unintentional injuries, children, paternal recognition and actions

Presented by Medical*Online